第ナルニ付我國家ニ於テモ同人ガ暹羅ニ於ケル功勞ヲ認メラレ此際相当叙勲ノ御詮議相成候様有之度茲ニ事情ヲ陳ジ及内申候也

添付書類

一　三木栄履歴書　壱通

一　勲章受領証明書　壱通

年　月　日　東京美術学校長

文部大臣宛

栄川は昭和五年、暹羅滞在二十年を機として九ヶ月の休暇を貰って帰国し、各地で講演や将来品の展覧会を行い、『暹羅の芸術』（同年十月、黒百合社。正木直彦も序文を寄せている）を出版した。同年十月二十五日、二十六日には本校会議室で暹羅古美術展覧会を開催し、二十五日には大講堂で「暹羅の芸術」と題する講演を行なっている。彼が寄贈した「シヤム仏教美術及工芸美術写真」は東京芸術大学附属図書館に収蔵されている。

三木奨学金の使途については『東京美術学校校友会月報』第二十六巻第三号に次の記述がある。

漆工科の催（三木榮氏寄附金の使途）〔中略〕寄附金の使途に就ては協議研究の結果該金の利子を以て漆工技術奨勵にあて元金は長く之を保存して同氏の美擧を永久に傳ふることゝせり　而して今年度は最初の試みとして漆工科在校生全部に寫生帳を與へ學校家庭の餘暇に於て務（努）めて草花の寫生を行はしめ其れを第一學期末教室に集めて展觀し渡邊教授、和田助教授も特に臨席、漆工科教官と共に審査しその内左記四名を撰んで賞金を授與したのである、審査の方針は二種に分ち（一）の部は寫生そのもの優秀なるもの、（二）は熱心なるものとしたり。

（一）　一席　安倍郁二（本科三年）

（挿繪參照〔省略〕）

二席　川村　源（本科三年）

（二）　一席　熊谷　茂（本科一年）

（挿繪參照〔省略〕）

二席　長谷川省吾（選科二年）

尚此れは今後毎回之を續けその他目下考案中のものとしては實習競技優秀者に對する材料費補助古美術見學旅行費の補助、特別研究の生徒派遣（遣）費、參考品の購入等、何れ其れ等の實行に際しては改めて報道すべし。

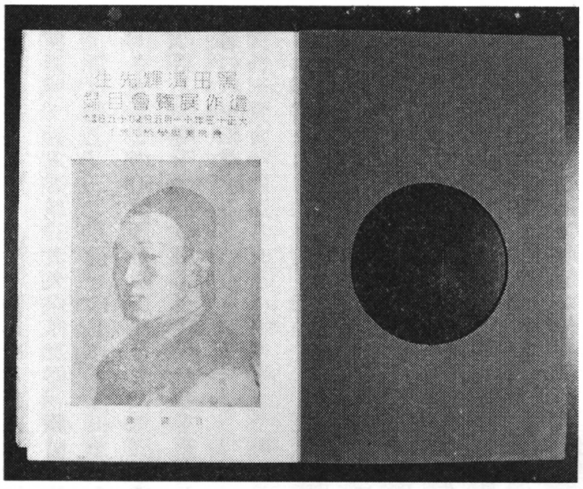
⑥ 黒田清輝の死去

月報抜粋にもあるとおり、西洋画科主任教授にして帝国美術院長、貴族院研究会所属議員、子爵の黒田清輝は、慢性腎臓炎および糖尿病により大正十三年七月十五日に麻布区笄町百七十七番地の邸内において死去した。十九日に青山斎場で神式による告別式が行われ、遺骨は黒田家の菩提所である麻生笄町長谷寺に埋葬された。黒田の死去により西洋画科主任は岡田三郎助となった。

黒田は本書第一巻（319～332頁）に記したとおり本校西洋画科の発足にあたって多大の尽力をなし、以来二十八年間同科を指導し、その間、文展開設以来審査委員をつとめ、最晩年に至って帝国美術院

長に就任した。その本校における多年の功労と美術界に於ける努力声望の際立って顕著であったことに鑑み、本校は黒田の危篤と同時に賞金給与、増俸、勲等進叙の上申を行い、その結果、死去の当日、黒田は勲二等に叙せられ、旭日重光章を授与され、職務勉励の賞金二千円を贈与された。賞金二千円の贈与は黒田に戸籍上の遺族が無く、死亡賜金下賜が行われなかったためにとられた措置である。

黒田の死は各紙に大きく取上げられ、知友の追悼談などが多く掲載されたが、そのなかで正木直彦校長は帝国美術院長としての黒田について次のように述べた。



『黒田清輝先生遺作展覧会目録』中扉　大正13年
のちに焼失した「朝粧」「昔語り」をはじめ、計7点の作品の写真が掲載されている。

〔上略〕　明治四十年に、文部省に美術審査會――文展――の設けられたのは、文相牧野子と黒田子との意見が一致して實現されたのだから、黒田氏一人の功ではなくとも、少くとも與つて力あつたのだし、帝國美術院が出現して後も大いに其向上發展に努力したから、専門家の出にして遂に院長となつた。元來一部の技術家で院長たることは難事であるが、子には統率の力が充分にあつたからでもあり、院長として活動する諸計畫を藏して居た點から適任であつた。黒田子の平素の持論から推せば、將來は日本畫、洋畫の區別を撤して繪畫部とし、更に工藝を美術に加ふるにあつたらしく、其實現は遠からず達せられさうであつたに、遺憾の事である。〔下略〕

（大正十三年七月十九日『国民新聞』）

黒田の死より四ヶ月後の十一月五日より同月十五日まで本校で遺作展が開かれた。この展覧会は黒田の生前から門人たちの間で計画されていたが、黒田の死去により図らずも遺作展となったもので、正木直彦、久米桂一郎、藤島武二、和田英作、岡田三郎助その他三十五名が発起人となり、杉浦非水はじめ関係者が意欲的に遺作を集め、代表作の「朝粧」「昔語り」「知・感・情」を含む四五一点を展示して一般公開した。その際、小冊子『黒田清輝先生遺作展覧会目録』（杉浦非水編）が発行された。会期中の十一月七日には上野精養軒で黒田の追悼会が開かれ、二百余名が参集した。

遺作展開会の二日前にパリでも黒田の友人や教え子たちによる追悼会が開かれた。「パリで開かれた黒田先生の追悼会」（三宅克己

著。大正十三年十一月七日『読売新聞』によれば、会場は日本人倶楽部で、結城素明、鈴木秀雄、大久保作次郎、藤田嗣治、矢崎千代治、田中保、清水登之、三宅克己をはじめ、黒田を知らぬ者までが多数集まり、さまざまの追懐談が繰広げられた。三宅はそのなかから藤田嗣治の話と矢崎千代治の白馬会時代の話を紹介しているが、ここには前者のみを転載する。

私は美術學校に在學の時から黒田先生には特別に御厄介になつて居ました。パリに參つた後も、此方にも先生に能く似たフランス人が居るのでさう云ふ人を見ると、先生に御目に懸つた様に思ひました。それで日本に居た時、最初私達は皆先生の描かれる様な畫を描かねば惡いものと心得、專心努力して見ました。然し迚も先生の様な氣持の畫は出來なかつた。

ある時平河町の先生の御宅に罷り出て、先生の御作畫を親しく拜見に行きました。處が美しい御庭を見ると、恰度先生の畫と同様な白百合の花などが咲亂れて居る。そこで私は其時深く考へました。先生の様な繪は畢竟先生の様な境遇にあつてこそ出來るので、その時私達の様な、安下宿の二階などにくすぶつて居る者達には及びも付かぬ處のものである事を悟りました。で私達はそれが惡くても、矢張自分の感ずる様な氣持の畫を製作すれば可いので、無理に先生の眞似をしなくても良いと氣が付きました。

それから先生には何とも相濟まぬと思ひながら自分の感ずる儘、勝手な自分の畫を描きました。其御蔭で二三回出品を試みました文展出品畫は、皆はねられました。其後パリに來てもう十年にもなりますが、私の畫は先生の畫風とは益々離れて來ました。それから先生は何時も云はれたことだが、黒い色は決して使用してはいけない。黒は最も禁物だと云はれましたが、時代の變遷は恐ろしいもので、もう今日そんな事を云つて居る時代では無くなつて、實は今その黒の御蔭でめしを喰つて居る様な始末です

昭和五年に至り黒田の遺言に基づいて、その遺産の三分の一を以て黒田記念館・美術研究所が開設された(350・476頁参照)。

⑦ 田辺孝次の在外研究

大正十三年九月二十七日、助教授田辺孝次は文部省より工芸史研究のため満二年間フランス、イギリス、アメリカ合衆国在留を命ぜられた。

田辺は明治二十三年四月十一日石川県金沢市に生まれ、同県立工業学校窯業科を卒業後本校彫刻科に入学、大正二年に卒業した。翌三年九月『美術週報』編集主任(同四年十月辞任)、同四年三月水谷鉄也と駒込彫塑研究所を設立、同六年三月『伊太利亜彫刻史』編著、同年四月審美書院に入社し『美術之日本』の編集に従事(同年八月辞任)、同七年十月精芸合資会社を創立、同年十一月本校美術史研究室助手となった。大正四年十二月以降は軍籍にあり、同九年三月には陸軍歩兵少尉となった。同八年には本校助教授となり、「体操」授業を担任し、教務掛と美術史研究室勤務を兼ね、大村西崖教授に師事して同十年五月以降は「東洋彫刻史」授業を分担したが、彼は工芸部と関わりが深く、同十年二月以降は図案科第一部、